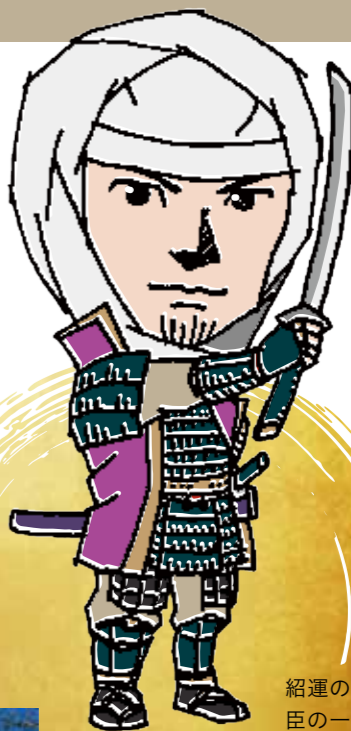


700余人で島津の大軍に挑む：壮絶な戦いでその名を刻んだ

高橋 紹運

たかはし じょううん
1548年～1586年



紹運の妻は大友宗麟の重臣の一人、斎藤鎮実(しげざね)の娘。婚約中に病気で容姿が悪くなり、婚約解消を申し出ますが、紹運は「心の美しさに惚れて婚約した」と言い、生涯相思相愛の夫婦となりました。



城の跡地には石碑が建てられ、「鳴呼壯烈岩屋城址」と刻まれている。(写真提供：太宰府市)

雷神の娘・閻千代を正室に、西国無双の強さを誇った鬼將軍

立花 宗茂

たちばな むねしげ
1567年～1643年



戦国最強の武将の一人。関ヶ原の戦いで敗北して城を追われますが、20年後に柳川城主として返り咲きました。

高橋紹運の実子で、立花道雪の養子となった宗茂。豊臣秀吉の天下統一の号令に対抗した島津軍を撃退して筑後柳川城の城主に抜てきされ、慶長の役の際には加藤清正の窮地を救ったといわれており、「西国無双」と称される強さを誇りました。

わずか7歳で城主になった立花道雪の一人娘

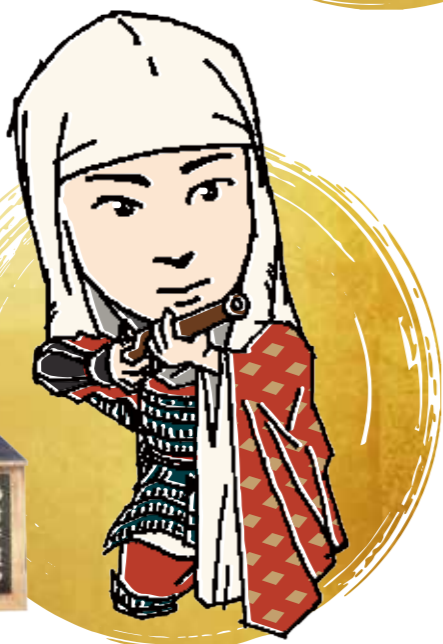
閻千代

ぎんちよ
1569年～1602年



立花宗茂の正室。父から帝王学を叩き込まれ、立花城に敵軍が攻め込んできた際、家中の女子軍を指揮したといわれています。

戦国無数の武将で、雷神の化身と恐れられた立花道雪の一人娘で、立花宗茂の正室。幼い頃から道雪に帝王学を叩き込まれた閻千代は、わずか7歳で家督を継いで筑前立花城の城主になりました。才色兼備の聡明な女性という一面と、父譲りの気性の激しさを併せ持ち、自ら武装して家臣や侍女を指揮して敵軍を撃退するなど、武勇伝が数多く伝えられています。



見事な戦略と采配で大軍に挑み、城を守った女傑

妙林尼

みょうりんに
本名、出自、生没年などは不明



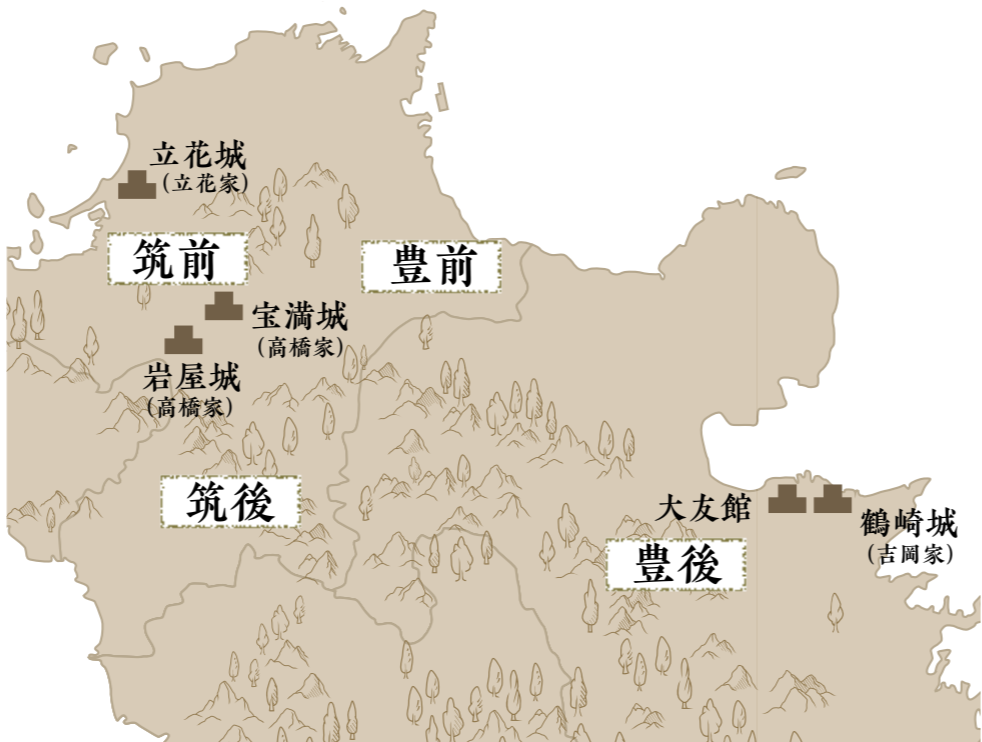
夫は大友家重臣で耳川の戦いで戦死した吉岡鑑興(あきおき)。現在、鶴崎商店街の「守護神」として商店街の一角に妙林尼の像が建てられている。

反乱軍を鎮圧して高橋姓となる

大友宗麟の時代の最盛期を立花道雪と共に支えた武将。大友家の三老の一人、吉弘鑑理の次男で、元の名を吉弘鎮理(よしひろあきまさ)といいました。彼が継いだ高橋家は、筑前の宝満城や岩屋城を拠点にしていた名族ですが、大友家への謀反を企てた末に破れ、領地を没収されます。高橋家を継いだ鎮理は後に出家して「紹運」となりました。

歴史に刻まれた岩屋城の戦い

天正14年7月、紹運が守る岩屋城に島津の大軍が攻めてきました。紹運は籠城し降伏を拒否します。結果は歴然ですが、誰一人として城を捨てずに残ります。その後、700余人で島津軍の兵士に立ち向かい、大軍に大打撃を与えますが、最後は力尽きて全員が討ち死にしました。島津軍の総大将は敵ながら紹運の死を悲しんだと伝えられています。これが、歴史に名を刻んだ壮絶な「岩屋城の戦い」です。



島津軍の大軍を相手に鶴崎城での籠城に挑んだ妙林尼。巧みな戦術で16回もの襲撃に耐えた後、全員の助命を条件に開城。手厚くもてなしますが、これこそが妙林尼の戦略だと敵は知る由もありません。豊臣秀吉の九州攻めを機に島津軍が撤退を決めると事は一気に動きます。盛大な酒宴で酔わせた翌朝、島津軍を送り出した後、先回りさせていた鉄砲隊に襲撃させて3人の大将を討ち取るという奇策は大成。知略と武勇にたけた妙林尼は、今なお多くの歴史ファンを魅了しています。

宗麟の時代を生きた人たち